

著者略歴

本名 田邊和子

1934年1月 千葉県銚子市に生まれる

1950年3月 日本同盟基督教団銚子教会にて受洗

千葉県立銚子商業高等学校卒業

1968年11月 詩集「鏡の中」（共著）出版

1969年9月 詩友「空が屋根」 入会

1971年4月 主婦の友通信教室「詩の作り方講座」入会

1977年11月 サトウハチロー主宰「木曜会」入会

職歴 千葉県立銚子高等学校・千葉県立銚子水産高等学校を経て、現在千葉県立匝瑳高等学校事務職員

現住所 〒288 千葉県銚子市笠上町5152
電話 0479 (24) 4822

詩集 るりいろの風 ￥1,000

印刷 1984年4月10日

発行 1984年4月15日

著者 たなべかずめ

発行者 佐藤 房枝

発行所 木曜会出版部

東京都文京区弥生2-16-1

サトウハチロー記念館内

電話 03 (811) 3595

印刷 啓文堂

東京都新宿区水道町52

電話 03 (269) 5251

落丁・乱丁はお取替えいたします。

る
り
い
ろ
の

た
な
べ
か
ず
め

序文

宮中雲子

潮の香を

身いっぱい漂わせて 田辺さんは来る
海で育ったわたしに

海から離れてくらすわたしに

“はい おみやげですよ”と

磯の匂いを運んできてくれる

銚子から 東京の木曜会に

わざわざ ホテルをとってやってくる

しばしば来られるというのでもなく

さして しゃべる訳でもなく

目立つようなこともしないのに

いつか 彼女は

どっしりと 木曜会の一員になっていた

彼女の心持ちの暖かさは

この詩集の どのページにも流れている
からっとした明るさと

独得のユーモラスな持ち味

それに むすびが

ぱちっと 小気味よくきまった作品が多い

詩に ひとりがちがつくが

そのひとりに かげりがない

湿っぽさがない

むしろ ひとりを

楽しんでさえいるようす

“お互いひとり同志 気楽にやっていこうよ”

そんな連帯感も働くせいかな

わたしは いつも

彼女の訪れを 心待ちにしている

春の雨

いらだち 10

すずめ 12

バレンタインデー 13

夕方の電車 14

丹頂づる 15

てるてる坊主 16

おつきみ 18

かなぶん 20

墓 22

春の雨 24

富有柿によせて 26

布団の中で 28

花電車

転勤 32

ひな人形 34

夜桜見物 36

母の日に 38

献血 40

夢 42

道 44

花電車 46

らくがき 48

版画 50

けん玉 52

霧

あこがれⅠ 56

梅雨の終りに 58

只今便りなし 60

旅 62

夏.....64

雨やどり.....66

霧.....68

何となく……バスガイドさん.....70

計算違い.....72

電車の窓から.....74

音.....76

おあずけ.....78

あこがれⅡ.....80

風の音

雨天順延.....84

風の音.....86

弟のおにぎり.....88

大家族.....90

カード売場にて.....92

呼名

.....

94

過失

.....

96

木枯し

木枯しⅠ

.....

100

木枯しⅡ

.....

102

年賀状

.....

104

嵯峨人形

.....

106

ラーメン

.....

108

親ばなれ

.....

110

甥からの誕生日プレゼント

.....

112

弱ごし

.....

114

星うらない

.....

116

春の雨

いらだち

落雷のための架線故障で
もう一時間あまり
電車の中にかんづめ

思いだしたように
いなづまが走り

地をつんざくような雷の音も

だんだんと遠くなってきた
雨もこぶりになったけれど
電車はまだ八街駅をでない

夕食の仕度するよって

妹にいつてきたのに

このぶんでは

いつ銚子につくことやら

おかずにと買った焼蛤が

網棚の上であくびをしている

すずめ

夕やけの桜の木に

すずめがたくさんとまっている

あたたかな冬だけれど

まだ桜には早い

窓をあけてどなってみたら

ぱっと花がとんでいった

バレンタインデー

今年もなぜかあの人には渡せなかった
ハンドバッグの中で
チョコレートがすねて横をむいている

夕方の電車

夕方の満員電車に乗る

ようやくの思いでつり皮にしがみつく

重い袋から太いしっぽを出した大根が

だだをこねるようにわたしと一緒にゆれている

たった二駅で 五分位のひととき

丹頂づる

ねえ たのむから

僕のみているところで

もう一本の足だしてみせて